加持身にして自受用身に住する義あらんや。天台等には他受用身を稱して尊特と云ふ。しかも瑜公以爲らく尊特とは卽ち本地身なるべしと、しかるに旣に加持といひ尊特と云ふ豈にこれ本地理佛ならんや。また胎藏中臺加持身寄當金界中臺報身毘盧遮那ニ故。謂敎主義同故云ヽ爾也と云ふも、金界の報身とは自受用にして自性身にあらず、その他本地自證の位には言語無きが故に加持身を現じて今經を說くが故に、般若寺抄には、字門道具足といひ、具身加持身等と釋するも、此等は抄の意を得ざるものなることを述ぶ、しかして瑜公古德自性身の中に加持身あるを知らずして、或は本地自證の說を立して、經疏の自證無言の文を害し、或は他受變化身敎主の義を成じて、顯敎の三乘一乘の佛に同じて疏家の深旨を隱し宗家の本意を失すとなし、今立する加持身は自性身の化他加持身にしてこれ自性身なるを以ての故に大師の自性身說法の義を壞せず、又加持身なるを以ての故に疏家の神力加持三昧の說に違せずと云ふも、恐らくは瑜公還て疏家高祖の眞意を失せることを釋し、

薄伽梵はこれ本地身なり、この本地身無言說の故に加持身を現じて說法す、是れを如來と云ふ。是れを以て同にして異、異にして同なり。本迹異なく、不思議一なり、しかも今且らく異に約して敎主を談ずるが故に如來是佛加持身と云ふ。旣に如來の號を以て本地身に簡異す、云何んが薄伽梵の句に加持身を含まんや、疏に違すること知るべし、又宗家は疏の加持身說法の義に簡うて、金剛頂自受法樂の說に依て、法身說法の義を談ず、自受法樂とは是れ自證の境界にして永く加持の相を絕す。若し本地の句の中に加持の義を含むといへば大に宗家の本意に違す。又以中臺尊故不壞大師等者。若し疏の釋に依らば、中臺とは卽ち加持身なり。若し爾らば中臺を以ての故に還て大師自證說法の義を壞す、云何んぞ壞せずと云ふや。

次に寂師の自義を辨ぜんとして、先づ大意を明かし次に文に就て解をなせり、その大意釋を要約していへば、古德の說區々にして、しかも何れも疏主の意を得ざるは、皆四種身の義を以て經疏所明の二身義を解するに依つてその眞意を得ざるとなす。されば若し疏主の意を得んと欲せば、則ち先づ四種身說及び諸師の異解を一掃し、當さに須らく空心にして經疏の文を讀むべし、しからざればつひに疏主の意を得ることなし、しかして當段の疏は惣じて三身あり、卽ち一には本地身、二には加持身、三には受用身なり、疏の第九卷の三三昧耶は三身の義を釋するものなりとて、三身を三三昧耶に配釋し、更に經疏の佛身義に及び經疏の始終其佛身を明かすを觀るに唯本地加持の二身ありて更に四身の說なし、故に或は自證之本、加持之迹といひ或は不思議法界種種方便道等と云ふ皆本地加持不思議二諦を明かす也。是を以て窃かに惟ふに疏主の意應さに不二加持身を以て敎主とすと云ふべし。不二とは全く不思議の二諦なり、謂く本地を全うして外に流出し、而も群機に對するを稱して加持となす。本地を離れて別に加持あるにあらず。

問ふ若し本地加持不二ならば何故に二身の別ありや、答若し佛に約すれば、則ち唯實相にして、本迹の異あることなし、しかも且らく機感に約するが故に、强て名けて迹となす。迹に對するを以ての故に亦强て名けて本と爲す。應さに知るべし本地加持、自性受用等の名は、唯機感にあつて佛には則ち無し、卽ち第一義は生佛の假相を絶し自他の差相を泯せる實相平等の身なることを釋す。

此の如く寂師は大日經疏は本地身、加持身、受用身の三身、または本地加持の二身の義を明かしその加持身の說法となすものである。しからば大日經疏に自性本地身の說法卽ち自受法樂の說法なかるべきかと云ふに、その義あることを述ぶ。卽ち密敎の意說法に二種あり、一には自受法樂の說、二には他受對機の說なり、卽ち自受法樂の說は、もと金剛頂經に出づるものにして、今の經疏の中に明かにその文言を見ざれどもその意義自ら存するとて其等の文義を擧げ、大師深く經疏の深意を探つて本地身の法爾常恒の說法の義を明かす。卽ち大師の大日經開題に此經に惣じて三本あり一に法爾常恒の本、二に十萬頌の廣本、三に三千餘頌の略本あることを明かさる。その中第一の法爾常恒の本とは、これ法身如來の自證の說法なり、しかれば法身無形、自證無言との義は疏家高祖の意を得ざるものである。二に他受對機の說とは卽ち加持身の說法である。前の自證の說法は自受法樂、唯佛與佛の境界なるが故に、衆生此を以て益を蒙ること能はず、是の故に加持方便、以て自證の如く妙法を演說す。

卽ち十萬頌本これなり、しかして古義には自證の說法を稱し、新義は加持門の說を談ず。これ各々一義を執するものとなし、此の二說を合し不二加持身の義を成ぜんとするものである。卽ちこの自證加持の二說は同にして異、異にして同なり、何んとなれば、若し能化に約すれば、加持の說時が卽自證の說時なり、越三三時一如來之日加持故。異にして同と云ふ。若し時間に約すれば、本地を全うして加持の說を作す故に同にして異と云ふ。しからば若し此を執すれば則ち彼を失ふ、豈に平等の法門と云ふを得んや。卽ち大日經疏に依れば曼荼羅についても自證と加持の二種の曼荼羅を明かされ、この本地加持は不二一體なれば、一を執すればその眞意を得ざるものである。

次に其體を辨ずるとて、經の薄伽梵の句、卽ち本地法身は唯理法身にあらず、この理を現證せる理智冥合の覺體なり。卽ち此の本地法身の體に理智二身を存することを明かさんとして本地と自證についての疏の釋を擧げ本地とは毘盧遮那の自體を指す、これ常途の眞如の自體と法體を同うするものなることを辨ず。次に自證とは常途に所謂如智如理を證すると同なりこれ正しく自受用成覺の義なり、故に自證とは並に理自性智自受二身を存す、かくの如く本地と自證と一往文義異なるものあるも、當段の毘盧遮那本地法身は正しく自證の義を明かし、其體理智二身を存し、この理智の二を攝して一と爲すもの、卽ち今の毘盧遮那本地身なり。卽ち曰く

所謂花臺具體及醍醐果德卽理智二法身也。攝二爲一者當段卽其義也。謂攝二中臺理智二身一。惣云二本地法身一應レ知

本地法身者。如智證レ如卽是自證境界也。又攝レ二爲レ一者以レ余觀レ彼唯歸二阿字一實諦一也。驗知本地法身者。卽毘盧遮那自證境界自受法樂位。故微妙寂寂出二過心量一。故次現二加持身一他受用而對二群機一也。若就二四身一明レ之自性受用合爲二本地一。於二此位一受二現法樂一名二自受法樂一。卽合二此二身一爲二本地身一。

此くの如く經の薄伽梵の句、卽ち本地法身はこれ理智二身自受法樂の體となし、次の經文の如來加持の四字は正しく本經の教主と住處の二種の成就を明かすとなす。しかしてその加持身の體を辨じ上述の如く本地法身をば自性自受用冥合の體なりとなすが故に、加持身はこれ他受用身となす。しかも加持身に種多あるも、今は中胎毘盧遮那の加持身にして、本地身を動せずして加持に住するが故に本地加持實には一體無別にして能所共に第一義諦に住すとなすものである。しかして此の如き不二の加持身を本經の教主となす。また常途の義に約すれば、無明の別に隨うて佛の色相を見るが故に、加持身はこれ隨染業幻と爲すも、此宗は加持力を以て、應度の者をして、法身の色相を見せしむ、故に加持身を如來金剛の幻と云ふ。金剛の幻とは卽ち不壞の化身である。是を以て本地と加持及び衆生とは一體無別である。故に加持身を見れば本地身を見、本地身を見れば則ち行者平等智身を知ると釋す。要を以て之をいはゞ隱覆せるをば衆生と名け、顯現せるをば法身と稱す。但だ隱顯を以て異と爲し更に異體なし、卽ち種子はこれ衆生、果者卽ち本地なり、果還て種子を成ずるをば加持身となす。應に知るべし、此の三展轉因果にして別體なきなり。

なほ高祖は金剛頂經に依て法身說法、自受法樂の境、これ眞言密教なることを釋成し、金剛頂經より本經を觀て本經も法身佛の說法となすものにして、未だ曾て疏家に依つて釋をなさず隨つて疏家の本經を加持身の說となすと高祖の所立と其義永く異なるものにして、兩祖各別の所傳なることを釋す。卽ち寂師は大師は金剛頂經に依り密教の教主は法身なることを明かし以て大日經の教主も同じく法身なることを解せられたりとなすものである。もつとも大日經に法身說法の文義あるも、疏は無相一法界を本として經を釋し、寧ろ法身不說の文義多く却て加持身說を明かすより大師は疏家の釋文に依り給はざりしとなすものである。

寂師の住心品疏私記に、疏家と高祖の教主義の相異を釋し、疏家は加持身說にして、一往常教の他受用身に似たり、しかも常教の他受用身と異りあることを辨じ、常教の佛身は順機說法なるも、今の教主は迂回なく、直に本地の內證を說く、卽ち五字門乃至所餘の諸眞言はこれ本地の三昧を明かす祕密語にして隨他意語にあらずとなすものである。なほ寂師の義よりいへば、かく加持受用身は隨自意語にして、本地を說くは、これ本地加持不二にして加持身はこれ本地を全うせる體なるに依る。なほ寂師は疏家高祖の釋義の相異する所以を解し、疏主は經文を消釋するを主となす、しかるに經文は淺相に寄せて深理を說かれたるが故に疏文また深理を顯はすといへども、而も文言顯相を帶ぶ、隨つて

疏釋を大師に比すれば一往淺略なり、卽ち大師は經の文句を釋するにあらずして、唯その深理を述ぶ、しかしてその理趣より教主を定むれば自ら法身佛ならざるを得ず、よく此意を知つて兩祖の釋文を讀まばよく兩祖の眞意を得らるべきとなす。

なほ寂師の住心品疏私記に、本經の教主につき古來衆論紛々たるは、これ深く經疏の意を極めざるに依ることを釋し、經疏の意に依れば、本地身と加持受用身の二種の佛身なり、しかも若し子細に分別すれば加持受用身は加持身と受用身との二身なり、しかれば經疏の文に依り細かに佛身を分てば三身あり、一には本地身、二には加持身、三には受用身なり、加持身と受用身に種々の詳釋あるも、その一義に依れば、加持身とは本地自證の位にのみ住しては、一切衆生益を蒙ること能はざるが故に、往昔の本誓に依り、神變加持以て一切衆生を化益せんとして、往昔の本誓を憶念する位なり、故に加持身の位にては多身なし、その受用身とは正しく群機に應じて、無盡の神變加持の妙用を現ずる位なるが故に受用身には無量無邊の身ありとなす。寂師の加持受用身につき評釋すべきもの存するも、今はその本地身について一言するであらう。師の住心品私記に、本地身は所謂實相平等の智身にして、理智五大を體となすことを釋し、更に本地身とはこれ如智が如理を證せる、理智冥合極果圓滿の位なることを述べ

且如二菩薩修行功成如智證如極果圓滿一是也。此時全二法界一而一身。未レ論二自他迷悟一耳。

かくの如きはこれ本地身とは始覺修正の極、如智如理を證せる自受用智身と同義にあらずや、卽ち師の教主義に本地身の體を釋するに本地と自證との二に分ち、その本地とは毘盧遮那の自體は、常途眞如の自體と同にして、その自證とは心自證心の位なれば、これ常教の如智如理を證する位と同なりとなす。卽ち毘盧遮那本地身とは、これ理智冥合の自證の體なり、自受用成覺の義なることを叙す。かくの如く本地身とは理智冥合の自證の體なれば、その體理智を存すると云ふも、寧ろ理智冥合の自受用智身と同義である。寂師の金剛頂經私記に金剛頂經の教主は、如智如理を證する自受用智身なることをのべ、なほ二教論に

自性自受用佛。自受法樂故各說二三密一。謂二之密教一。又云唯有二自性法身一。以二如義眞實言一。能說二是絶離境界一。是云二眞言祕教一。金剛頂經是也。

等の文を引き、眞言密教の教主をは自性受用佛といへば、理智二身各別の如くなるも、自性は理にして自受用は智なり、智理を證するをば自受用となす、此の如く理智冥合の體を顯はさんがために、自性自受用と云ふも、其實はこれ自受用智身なることを明かす。金剛頂經の教主は、もとより理智冥合の自受用智身なるも、師は大日經の教主をも、金剛頂經と同義に解せんとするものである。これ師は本地の體は理智五大なり、理智冥合の自證の體なりと釋すると共に、その理はこれ常途眞如の體、智はこれ常途の如智なりとし、この如智如理を證する位をば本地身の體なりと觀るより、大日經も金剛頂

經と同じく理智冥合の自受用身を教主となすに至りしものか。此の如く兩部大經の教主は理智冥合の自受用身なるべしとの釋をなすに至りしは、これ師は理をば常途眞如の理と同意に解するに基くものならんか。卽ち師は教主義に本地加持不思議二諦の義を釋し、疏主の意は本加不二の加持身教主の義なることを辨じ、更に本加不二ならば本加二身の別を立する要なかるべきも、本加不二にして、しかも本加二身の別あることを明かし、佛に約すれば本加の別なく、たゞ一實相なるも、本加の別は機感にあることを釋し、その證文として起信論及び記釋を引用せり。

起信論云。諸佛如來唯是法身智身之身。第一義諦無有世諦境界。離於施作。但隨衆生見開得益。故說爲用。記釋云。若廢機感。如來唯是妙理本智更無應化世諦生滅相。文

かくの如く一如法身の境は、本地加持の差相、生佛自他の區別を絶する義を證せんとして、無相眞如の法を宗極となす起信論を引用せるより觀るも、また法身の體をば理智冥合の體なることを釋し、その理とはこれ常教の眞如の理體なりとなすより觀るも、寂師は台密の諸師の如く無相眞如の法を宗極となすものなることを知らるゝのである。かく無相の法を宗極となすゆゑ、如智如理を證する自受用身を究竟の佛身となし、自性法身を立せず、兩部大經の教主共に理智冥合、始覺成滿の自受用身となすに至りしものか。

思ふに法身如來の大覺の體は理智不二、能所證一如の大覺體である。しかもこの理智冥合の成佛の覺體を解するに本有と修生との二門あり、菩薩修行の功を成じ、始覺修生の極、如智を以て如理を證し極果圓滿する義を明す修生門と、修生を俟たず、法爾本有の理智一如、能所不二の成佛の大覺體の實在を明す本有門とである。しかしてその修生門は顯教にして、本有門は密教である。また密教中にて金剛界は修生門、胎藏は本有門なりとも一應いひ得らるべく、また疏家高祖の教義を相望すれば、疏家は修生、高祖は本有、また日本密教の教學史上よりいへば、新義は修生、古義は本有、また古義のうちにても東寺は本有南山は修生の義を表てとするものなりともいひ得らるゝのであるが、それのことは別に釋することとして、今寂師兩部大經の教主を明かさんとして、金剛頂經の教主は始覺修生、如智如理を證する自受用身なることを明かすと共に大日經の教主義には、佛身に本地身、加持身、受用身の三身あることを釋し、本加不二の加持身を大日經の教主となすものなるが、その究竟の覺體たる本地身をば、金剛頂經の教主たる智法身と同義の如く解するものである。此の如く兩部大經の究竟の佛身をば自受用智身の如く釋をなすにとどまり、大師二教論に密教の教主は自性自受用佛なり、或は自性法身なりと明し給へる文をも、これ理智冥合の故に自性自受用と釋し給ふも、實にはこれ自受用智身なりと解し、自性本地身の說法の實義を解し得ざるものは、これ自證至極の法身の體をば無相一如の眞如の理なりと觀て未だ高祖大師の本有法爾の大覺、本有の六大等の祕義を解せざるに依る乎。なほ本地加持の和會說としては淨空・法住等の教主義及び有相無相の教旨については運敞淨嚴等

の所釋等述ぶべきことあるも、これらは密敎研究、拙著弘法大師の佛敎觀等に一應敍述し置きしゆゑ
ここに略することである。

昭和十九年一月十日印刷
昭和十九年三月一日發行

〔一〇〇〇部〕　非賣品

著者兼發行者　和歌山縣伊都郡高野町高野山　金山穆韶

印刷者　京都市西洞院七條南（西京七）內外印刷株式會社　代表　宮崎勇治

（認承會版出 い 11052 號）

不許複製

發行所　和歌山縣伊都郡高野町　高野山大學出版部　振替大阪八〇八二二番

終